

白杉価値論にかんする若干の考察

——いわゆる「効用測定の原理」を中心として——

岡 崎 栄 松

一

周知のように、いわゆる効用測定の困難にかんする問題は、価値を効用——正確には「最終効用度」(ジエヴ
オンズ)または「限界効用」(ウィーザー)——によって規定しようとする効用学派にとって、解くべくして解
きえない一大難問をなすものであった。この点について白杉教授はこういつておられる。——「効用学派は、財
の有効性に対して人間の認める個人的主観的な意義、すなわち『効用』(utility; Nutzen)もしくは『稀少性』
(raritas)を基礎として、社会的客観的な交換価値を規定しようとする。そのさい、彼等は個人的主観的な効用の
量的規定性を仮説的に前提している。しかし、本来、個人的主観的であるにとどまるものが、一体どうして客観
的に量化されうるか。これは、効用価値説を悩ましたところの根本問題であった」(『価値の理論』ミネルヴァ書房、
一九五五年、一〇三—一〇四頁)。

白杉教授はまた、パレートの選択理論は「本来、個人的主観的であるにとどまるものが、一体どうして客観的
に量化されうるか」という難問をただ回避したにすぎないとして、つぎのように述べておられる。——「パレ

トは、効用測定の困難に関する批判にかんがみ、効用の測定単位に関するワルラスの仮説を放棄して、新しく選択の理論を展開し、無差別曲線の構成により効用の直接的測定を避けながら、しかもなお限界効用理論の重要な一切の命題を包摂しようとする理論に到達した。しかし選択理論は効用の直接的測定を回避したにとどまり、主観的な効用の量的規定性を暗黙の前提としている点に変わりはなく、それによって価値論が回避されるかのごとく考えたのは錯覚であった。けだし、選択は比較をふくみ、比較は同等な共通性したがって量的規定性を前提することなしには不可能なのであって、そのかぎり効用価値説の根本前提は撤回しつくされているわけではないからである」（同上、一〇三ページ、力点——白杉教授）。

パレート選択理論にたいするこの評言はまったく当を得たものというべきであろう。実際、パレートがその無差別曲線の作成によって限界効用学派のかのアポリアを処理できたと考えたのは、たんなる「錯覚」でしかなかったのである。

それはともかく、ここでわれわれが注意しなければならないのは、「本来、個人的主観的であるにとどまるものが、一体どうして客観的に量化されうるか」という問題は、たんに「効用価値説を悩ましたところの根本問題」であつたばかりでなく、白杉教授自身にとつても一つの「根本問題」であつたという点である。すなわち教授は、限界学派が効用による価値規定にさいして「個人的主観的な効用の量的規定性」をたんに「仮説的に前提している」にすぎないところに、この学派への不満を感ぜられるわけであり、そこでまた教授は、「効用測定の原理」（同上、一〇七ページ）あるいは「〔効用の〕客観的な量化の原理」（同上、三五ページ）を探究することをもって教授自身の課題とされるのである。いいかえれば白杉教授は、限界学派が十分説得力のある効用測定論を提示するこ

となしに「社会的客観的な交換価値」を効用によって規定しようとしている点に、この学派の重大な理論的欠陥をみいだされるのであり、そしてここからして教授は、「効用価値説の根本前提を吟味することは、今日なお理論的意義をもっている」(同上、一〇三ページ)として、教授独自の効用測定論を展開されるわけである。そこで以下われわれは、教授によって展開された効用測定論はどのような内容をもっており、その独自性はどこにあるか、また「効用測定の原理」の樹立という教授の課題は、はたして実現されているといえるかどうか、さらにまた、教授がその一種独特な効用測定論を提唱されるさいには教授はいったいどのような理論的見地にたっておられるか、といった諸点を検討しようと思う。つまり、白杉価値論の一構成部分としての効用測定論をとりあげ、そのもつ意味内容を立ち入って考察することが、この小論の目的とするところである。^(注)

(注) 筆者はさきに拙稿『いわゆる使用価値の捨象にかんする一考察——故白杉教授「価値の理論」によせて——』(本誌第十一卷第一・二合併号所収)のなかで、「使用価値の捨象」および価値の実体規定の問題をめぐる白杉教授の見解を吟味・検討しておいたが、その後、この拙論にかんして、教授の門下生の一人・吉田茂芳氏からの反駁文『いわゆる使用価値の捨象について——岡崎氏による白杉教授批判の検討——』(「龍谷大学経済学論集」第二卷第三号所収)があらわれた。この反駁文において吉田氏は、筆者が前記拙稿のなかで効用測定の問題にかんする白杉教授の所説にまったく言及していないとして、その点に不満の意を表明されている(前掲『経済学論集』六〇—六一ページ参照)。白杉教授の効用測定論を直接のテーマとする本稿は、したがって、吉田氏のみぎの批判的立言への実質的な回答の意味をもつこととなろう。

二

さて白杉教授は、「本来、個人的主観的であるにとどまる」効用が「客観的に量化されうる」のはどのような場合だと考えられるのであろうか？ つまり教授は、「効用価値説を悩ましたところの根本問題」をどのように

解決しようとするのであるのか？

白杉教授はまず、効用が「客観的に量化される」ためには、それが欲望充足手段によって媒介されなければならないと思惟される。そして教授によれば、この点はジュヴォンズ、メンガー、ボエーム・パウエルクといった効用学派の代表者たちが——程度の差はあるにしても——すでに事実上感得していたところである。教授はいつておられる。——「効用価値説を提唱した指導的な理論家たちは、効用の主体的契機たる欲望の充足手段を媒介とすれば、効用に量的規定をあたえることができると考えていたように思われる。すなわち、主観的な効用の大小は、欲望充足手段の多少に自己を客観化する欲望の大小ないし強弱によって測定されうると考えていたように思われる。これは主観的なものの客観的量化を考える方法としては妥当であつたといわなければならない」

〔「価値の理論」一〇四（ページ）〕。

このように白杉教授は、「効用の主体的契機たる欲望の充足手段を媒介とすれば、効用に量的規定をあたえることができる」とした効用学派の代表者たちの思考様式をもって、「主観的なものの客観的量化を考える方法としては妥当であつた」と解されるのであるが、教授のこうした見解は、ジュヴォンズの効用理論を評して教授が「つぎのように述べておられることから、うかがい知ることができるであろう。

「それ〔ジュヴォンズの効用理論〕において決定的に重要ではないかと考えられるのは、彼が、感情そのものは測定されえないけれども、人間の決意によってこれを評価することができる点となっている点である。この点だけは、彼の理論の快樂主義的傾向から引離して評価するべき、彼の効用理論の最も重要な積極的肯定面の一つとって過言でないであろう。しかし、おしいことに、彼はもう一歩つっこんで、効用の間接的測定を可

能ならしめる人間の決意とは、畢竟、効用を獲得するために、必要な代価の支払に對する決意にほかならない、ということを確認にしていない。彼のはつきり言明しているごとく、意志は、感情とおなじく、これを直接に測定することの不可能なものである。意志は、ただ、その決意した支払、わるべき代価の大小によって評定されるよりほかないのである。そうだとすれば、効用の測定者は、実は、効用を獲得するために支払わらるべき代価である、といわなければならない。この見地からして、私は、彼がある個所で、『財貨の価格は、その財貨の購買者にたいして有する効用についてわれわれの有する唯一の試金石である』といっているのに、ふかい興味をおぼえる。これによって、彼もまた、効用の測定はただ効用を獲得するために支払わらるべき代価もしくは価格という客観的なものに媒介されてのみ可能であるということをし、すくなくとも本能的に、感得していた、といえそうであるからである」(同上、一〇六—一〇七ページ、力点——白杉教授)。

みられるとおり白杉教授は、ジェヴォンズが、人間の感情そのものは測定しえないにしても人間の意志または決意が効用の間接的測定を可能にする^(註)と考えた点に、彼の効用理論における「最も重要な積極的肯定面の一つ」をみとめられるのであり、他方、彼が、「効用の間接的測定を可能ならしめる人間の決意とは、畢竟、効用を獲得するために必要な代価の支払に對する決意にほかならない」という点を——いわば本能的に感知していたといえ——明確にしていないうちに、彼の理論の不十分さをみいだされるのである。そして教授自身は、「効用を獲得するために支払わらるべき代価」こそが「効用の測定者」であると主張され、このような欲望充足手段——支払われるべき価格または貨幣——にかかわらせることなしには「本来、個人的主観的であるにとどまる」効用の「客観的な量化」は実現不可能だとされるのである。

（注）念のために、この点にかんするシェヴォンズ自身の文章を引用しておけばつぎのとおりである。——「人々が、人間の心情の感ずるところを直接に測定する方法をいつか発見するであろうということには、私は躊躇する。快樂もしくは苦痛の単位は想像することも困難である。しかし、たえずわれわれをうながして売買し貸借し、労働および休息をなし、生産および消費せしめるものは、これらの感情の総果である。そしてわれわれがその比較的総果を評定しなければならぬのは、感情の数量的効果からである。われわれは重力そのものの性質を知ったり、測ったりすることができないと同様に、感情を測ることができない。しかしわれわれは、重力を振子の運動におよぼすその効果によって測るのとまったく同様に、感情の相等性または非相等性を人間精神の決定（the decisions of the human mind）によって評定することができるであらう。意志はわれわれの振子であって、その振動は市場の物価表に詳細に記録されるのである」（W. S. Jevons, *The Theory of Political Economy*, 4th ed., pp. 11—12.）

しかしながら、白杉教授の考えでは、「効用の測定はただ効用を獲得するために支払わらるべき代価もしくは価格という客観的なものに媒介されてのみ可能である」とはいえ、価値論としての効用理論にとっては、効用測定の間接者を直接、支払われるべき価格または貨幣に求めることはとうてい許されない事柄である。というのは、もともと価値論は貨幣生成の論理に必然性や価格の本質などを説明すべき任務を担っているはずのものであるのに、この場合には価値論に最初から貨幣や価格が無造作に前提されることになっていくからである。そこで教授はこのような論理矛盾からまぬがれるために、効用測定の間接者を、支払われるべき価格または貨幣においてではなく、支払われるべき労働において把握しなければならぬとされるのである。この間の事情を説いて教授はつぎのように述べておられる。

「効用測定の原理を（貨幣）価格に求めるということは、価格論としては許されるでもあろうが、価値論としての効用理論にとっては致命的な循環論的誤謬である。けだし、（貨幣）価格を説明するための価値論である

のに、その価値論に価格を前提しなければならぬということになるのだからである。しかれば、効用を獲得するために支払わらるべき代価が、循環論におちいることなしに、効用測定の原因たらしめられうるのは、いかにしてであろうか。それが人間の労働においてとらえられる場合においてである。人間の労働は、効用を獲得するために支払わらるべき最も本源的な——したがって最も一般的な——代価である。かくして、効用測定の原理は労働によってあたえられる」(『価値の理論』一〇七ページ、力点——白杉教授)。

つまり白杉教授は、効用の「客観的な量化」のためには是非とも効用が欲望充足手段によって媒介されねばならないにしても、価値論の抽象段階では、この欲望充足手段は——効用学派の場合がそうであったように——支払われるべき価格または貨幣においてとらえられてはならず、それはどこまでも、支払われるべき労働において把握されねばならないと主張されるわけである。教授によれば、人間の労働こそは「最も本源的な」「最も一般的な」欲望充足手段であって、かかるものとしての労働に媒介されるときにのみ、「本来、個人的主観的であるにとどまる」効用が、「致命的な循環論的誤謬」におちいることなしに「客観的に量化される」のであり、こうして「効用測定の原理」ないし「〔効用の〕客観的な量化の原理」がうちたてられるのである。

(注) 白杉教授は、価値論の抽象性という視角からのこうした効用学派批判を『価値の理論』の随所でおこなっている。たとえば教授はボエームの主張、すなわち「各人は彼が一定の貨幣額によって獲得しうる快楽の大きさを念頭において、それをもって彼は一定の快楽が貨幣支出に値するか否か疑わしい場合に測定するのだと私は信ずる」(Böhm-Bawerk, *Positive Theorie des Kapitals*, Vierte Auflage, S. 251.)と主張にたいして、こう論述されている。——「これによって、ボエームの主観価値説が貨幣を前提しているということは、明瞭であろう。ところで、このように主観的な価値の測定の媒介者を貨幣において考えるということは、おそらく、商品社会においては貨幣こそが通常もつとも一

般的な欲望充足手段であることに照応するものであろう。しかし、貨幣は人間経済一般の究極の欲望充足手段とはいえないばかりでなく、それ自体、抽象的な経済価値の独立形態であつて、その本質は価値論によつて初めて究明されるものである。してみれば、価値の究明に貨幣を前提することは、価格を前提する場合と同様、循環論の誤りをおかすものである」〔『価値の理論』一一一ページ、力点——白杉教授〕。

教授はまた、「価値論によつて究明されるべき貨幣を、経済学の出発点に前提するということは、単にオーストリア学派のみならず所謂近代理論一般の特徴といつてよいであろうが、近代理論のこのような特徴をあらかじめ公言しているのは、ケンブリッジ学派の始祖マーシャルである」〔同上、一一一ページ〕として、価値論の初発から貨幣や価格を前提するマーシャルにむかつて、「くりかえしいうが、我々の展開している価値の理論のこの段階においては、貨幣や価格を展開することは許されないのである。ただし、我々は、貨幣や価格の成立を論証することのできるような価値概念の論理的展開を問題にしているのであるからである」〔同上、一三三ページ〕と批判されている。

こうしてわれわれは、いまやつぎのようにいうことができよう。——ジェヴォンズ、メンガー、ボームその他の限界効用学派にあつては、経済学の出発点において単純に貨幣や価格が前提されていて、効用測定の媒介者が、欲望充足のために支払われるべき価格または貨幣に求められているのにたいして、白杉教授は価値論の抽象段階をつよく意識されながら、「効用を獲得するために支払われるべき最も本源的な——したがつて最も一般的な——代価」としての労働こそが「効用の測定者」だとされている、と。そしてまさにこの点に、われわれは教授の効用測定論の独自性をみるべきであらう。実際、「効用測定の原理」にかんする白杉教授の所論は、かの「致命的な循環論的誤謬」からまぬがれるために、あえて効用測定の媒介者を「最も本源的な」「最も一般的な」欲望充足手段としての労働に求めるところに、その眼目があるといつてよいのである。^注

（注） 白杉教授のこのような効用測定論は、教授の労作『経済学史概説』（ミネルヴァ書房、一九五六年）においても見う

けられるものであって、なかんづくつぎの一文では、「効用測定の原理」にかんする教授の見解がいわば集約的に論述されているといえよう。——「効用価値説の創始者および發展者たちは、効用の量的規定性は、効用の主体的契機たる人間の欲望の充足手段を媒介とすれば、これをあたえることができると考えていたように思われる。すなわち、主観的な効用の大小は、欲望充足手段の大小に自己を客観化する欲望の大小ないし強弱によって測定されうると考えていたように思われる。これは主観的なものの客観的量化を考える方法としては、全く正しい方法であったといわなければならない、しかし、そのさい彼等は結局のところ、効用量化の原理を欲望充足手段としての貨幣に求めているように思われる。ただし、商品生産社会においては、貨幣が最も一般的な欲望充足手段と考えられるからである。しかし、貨幣は人間経済一般の究極の一般的欲望充足手段とはいえないばかりでなく、それ自体、抽象的経済価値の独立形態であって、その本質は価値論によってはじめて究明されるものである。したがって、価値の究明に貨幣を前提とするということは、循環論的誤謬である。主観価値説が貨幣価値の説明に挫折せざるをえなかったのは、当然である。しからば、主観的な欲望ないし効用の客観的量化を保証するような最も一般的な欲望充足手段は、何であるか。人間の経済であるかぎり、それは労働でなければならぬ」(『経済学史概説』三三二—三三三ページ、力点——白杉教授)。

三

以上われわれは、白杉教授が、限界学派には十分説得力のある効用測定論が欠けているとして、「効用測定の原理」をうちたてることをもって教授自身の課題とされていたこと、そして教授は、効用を「最も本源的な」欲望充足手段としての労働にかかわらせる場合にのみ、「本来、個人的主観的であるにとどまる」効用が「客観的に量化されうる」と考えておられたことを見てきた。ところで、「効用測定の原理」の樹立という教授の課題は、効用を「最も本源的な」欲望充足手段としての労働で媒介することをつうじて実現されたといえるであろうか？

われわれはすんでこの問題の検討に移ることにしよう。

ここでわれわれはつぎの点を想起すべきである。すなわち、ジェヴォンズ効用理論の評価にあたって、白杉教授は、彼ジェヴォンズが効用の可測性の根拠を人間の意志または決意に求めたところに彼の理論の「最も重要な積極的肯定面の一つ」をみとめられ、他方、「効用の間接的測定を可能ならしめる人間の決意とは、畢竟、効用を獲得するために必要な代価の支払に対する決意にほかならない」ことを十分明確にしていないうところに彼の理論の限界をみいだされていた、という点がそれである。教授によって「効用の測定者」とされた労働は、実は、みぎの「効用を獲得するために必要な代価（＝価格または貨幣）」が、価値論の抽象性にかんがみて、「効用を獲得するために支払わらるべき最も本源的な——したがって最も一般的——代価」に還元されたものにすぎなかったのである。してみれば、かかるものとしての労働が、支払われるべき価格ないし貨幣の場合と同様、「支払に対する決意」を前提するものであることは自明であろう。つまり、白杉教授が効用測定の唯一の媒介者と考えられる労働とは、商品の生産のために必要な労働ではなくて、商品の購買のために必要な労働、あるいは欲望充足のために支出しようとする決意、される労働にほかならないのである。げんに教授自身、つぎのように述べておられる。

「社会的欲望の根源たる各個人の欲望は、その種類の如何を問わず、すべて個別的主観的なものであるが、しかし、さきに一言しておいたごとく、それを欲望充足手段にかかわらしめることによって、客観的に量化されうる。しかしして価値論の段階においては、欲望量化の媒介者が——貨幣ではなくて——最も一般的な欲望充足手段としての労働でなければならないことについては、これまたさきに一言しておいたところである。欲望の大きさ（もしくは強度）は、その時その所においてあたえられている生産上の技術的諸条件にしたがって、

その充足に支出しようと決意される労働の分量によって測定される。しかして、このようにして測定される欲望の大きさは、同時に、それを充足することによって得られる満足感の指標と考えることができる。……とこゝろで、欲望の充足が継続的に反覆される場合には、その充足に支出しようと決意される労働の分量によって表示される欲望の満足感は、次第に減少する傾向をもつ。けだし、一定の時点ないし期間をとってみると、具体的な個々の欲望には一定の限度のあるものであって、その限度を超えた充足から得られる満足感は次第に減少する傾向をもつからである」(『価値の理論』一三一—一三三ページ、カ点は白杉教授、ゴシックは引用者)。

これらの文言をもつてすれば、白杉教授によって「効用の測定者」とされている労働が、商品の生産のために必要な労働ではなくて、商品の購買のために支出しようと決意される労働、あるいは——教授自身の言葉でいえば——「欲望」充足に支出しようと決意される労働」にほかならないという点はまったく明白であろう。だが、そうだとすれば、このような労働によって測定される効用は、「客観的な量化」をなしとげることなしに、依然として「個人的主観的であるにとどまる」ほかないであろう。というのは、効用測定の唯一の媒介者としての労働そのものが、実際には需要者ないし購買者の個人的な意志決定——「支払に対する決意」——を前提としているのだからである。もつとも白杉教授は、価値論の抽象性をつよく意識されながら、効用測定の媒介者は支払われるべき価格または貨幣においてではなく、どこまでも、支払われるべき労働においてとらえられねばならないと力説されている。^(註)しかし、このことによっては事態になんの変化ももたらされないであろう。というのは効用測定の媒介者が、支払われるべき価格または貨幣において把握されようが、支払われるべき労働において把握されようが、いずれにしても効用が、欲望充足のために支出しようと決意されるものによって測定される点ではな

んのかわりもないからである。

(注) この場合には白杉教授は資本主義社会を事実上、たんなる物々交換の社会に還元しておられるといつてよい。いまこの点を示すものとして、われわれはつぎの二つの文章を引用しておこう。

「資本主義社会においては、それを構成する諸個人について見るかぎり、労働が最も一般的な欲望充足手段であるというようなことはいえないと、いわれるかも知れない。現象的には、たしかに、いわれるとおりである。そして貨幣こそが、そこの最も一般的な欲望充足手段である。しかし我々がいま問題にしているのは、資本主義社会のそのような現象がいかにして成立してくるかということなのである。そのために我々がこゝ価値論の段階において前提するのは、彼の労働のみが彼の欲望充足を保証する、ような商品生産者である。いいかえると、単純な商品生産者である」(同上、一三一ページ、力点——白杉教授)。

「我々の価値論においては、問題の経済主体は、すでに貨幣所得をもった消費者ではなくて、さきに述べたごとく、彼の労働のみが彼の欲望充足を保証するような商品生産者である。彼はまだ彼の——主として交換にあてるために——欲する商品の価格を知らない。彼が知っているのは、彼の欲する商品は、それを生産するために一定量の労働を必要とするということだけである。このような事情のもとでは、彼が一定の商品に対して投下する労働量は、その商品に対する彼の選好の度合を表示するといつてよいであらう。そしてまた、これが『あたえられた欲望』の測定を可能にする唯一の基礎観念なのである」(同上、一一三ページ、力点——白杉教授)。

このように白杉教授は、価値論で前提される「経済主体」は「彼の労働のみが彼の欲望充足を保証するような商品生産者」であり、そして「彼はまだ彼の——主として交換にあてるために——欲する商品の価格を知らない」とされて、資本主義社会を事実上、物々交換のおこなわれる社会に解消されるのであるが、しかしこれは、いわゆる冒頭商品の性格規定にさいして「問題の商品は発展しとげた資本制商品以外の何物でもない」(同上、一五ページ)とされた教授自身の立場と抵触するものといわなければならない。

ちなみに、みぎの第二の引用文を見、見たところでは、あたかも白杉教授は「効用の測定者」を、商品の生産のために必要な労働、あるいは商品に投下され対象化された労働に求めておられるかに思われるかも知れない。というのは、そこ

には、「彼が一定の商品に対して投下する労働量は、その商品に対する彼の選好の度合を表示する」(力点——引用者)云々とあるからである。しかし、この章句における「彼」とは、ある商品の需要者ないし消費者のことなのであって、けつして、その商品の生産者を意味しているわけではない。だからまた、「彼(「需要者」)が一定の商品に対して投下する労働」とは、実は、需要者が「彼の欲する商品」にたいして「投下」つまり支出しようとする労働のことにはほかならないのである。事実、こう解することなしには、みぎの章句はまったく意味をなさないであろう。こうして白杉教授は、ここでも相変わらず、効用測定の媒介者(または効用測定を可能にする「唯一の基礎観念」)を、欲望充足のために支払わなければならないのである。

かくてわれわれは、効用を「最も本源的な」欲望充足手段としての労働に媒介することによって「効用測定の原理」をうちたてようとする白杉教授の企ては、教授の意図に反して不成功のままに終わっているといわざるをえない。白杉教授自身は、「各個人の欲望は、その種類の如何を問わず、すべて個別的主観的なものであるが、しかし……それを欲望充足手段「最も一般的な欲望充足手段としての労働」にかかわらしめることによって、客観的に量化される」(前出)と確信されていたのであるが、これはしかし、実際には一つの「錯覚」でしかなかったというほかはない。したがってまた、「本来、個人的主観的であるにとどまるものが、一体どうして客観的に量化されるか」という「効用価値説を悩ましたところの根本問題」は、教授の多大の努力にもかかわらず、依然として未解決のままに放置されているのである。そしてこれは、教授の効用測定論が限界学派の場合と同様ブルジョア社会の交換現象をもっぱら需要者⇨消費者の立場から観察したものにすぎないかぎりで、むしろ当然の帰結だというべきであろう。(註)

(註) もっとも白杉教授は限界学派の消費者的な立場を批判しながら、つぎのように書いておられる。「……総じて、オー
ストリア学派の経済学においては、個人は一定の所得をもって市場にあらわれ、貨幣と交換に諸財を買入れる。これらの

財は社会的な生産過程で生産されるのであるが、それがどこでどうして生産されたかはこの消費者の関知するところではない。評価の対象たる諸財は、社会的生産の過程から個人的消費の過程に、いわば外部からあたえられる『与件』であるにすぎない。消費者はただかくしてあたえられる諸財を評価し、彼に『極大満足』をあたえるような比率で、すなわち『限界効用均等の法則』が成立するような仕方、これを購入し消費すればよいかのごとくに考えられているのである。しかし、このような単純な消費者の観点をもってしては、到底、資本主義経済の本質を理解することはできない」（『経済学史概説』三三二ページ）。

オーストリア学派への白杉教授のこの批判はたしかに的を射たものということができよう。しかし、すでに一言したように、教授によって「効用の測定者」とされている労働は商品の生産のために必要な労働ではなくて、需要者≠消費者がその欲望充足のために支出しようとする労働にほかならないのであり、そしてそのかぎり、教授自身の効用測定論にたいしても、オーストリア学派の場合と同様、「評価の対象たる諸財は、社会的生産の過程から個人的消費の過程に、いわば外部からあたえられる『与件』であるにすぎない」といわなければならぬであろう。オーストリア学派と教授の場合とのちがいはただ、前者にあつては「評価」の手段が単純に貨幣に求められているのにたいし、後者の場合にはそれが労働——といつても、支払われるべき労働——にまで還元されているという点にあるにすぎない。そうだとすれば、ブルジョア社会の交換現象をもつばら「消費者の観点」から眺めている点では教授の場合もオーストリア学派の場合も、べつに異なるところがないというべきであろう。

四

さて、すでにみたように白杉教授の効用測定論の眼目は、「最も本源的な」欲望充足手段としての労働に効用測定の媒介者を求めるところに存するのであるが、では教授はいったいなぜ、このような一種独特な効用測定論を展開されたのであろうか？ それは、価値論の分野における教授の基本的な問題意識、すなわち労働価値説

と効用価値説とを価値論のデ、イ、メン、ジ、ョン——価格論のそれではなく——において「総合」しようとする問題意識に由来しているといつてよい。この点は、教授が、経済学の発端に無概念的に貨幣を前提するマーンシャルにたいして、「彼は、しばしば、効用価値説と労働価値説とを綜合したといわれる。しかし、彼は価格論の局面において両説を単に折衷したにとどまるのであって、本来の価値論の局面において両説を真実に綜合したのではなかつた」(『価値の理論』一一二—一三)と批判されていることから明かであろう。つまり白杉教授は、限界学派が効用による価値規定にさいして無造作に貨幣を前提しているかぎり、この学派のいわゆる価値論は実際にはたんなる価格論でしかありえないとの考えのもとに、「効用の測定者」をあえて「最も本源的な」欲望充足手段としての労働に求められたのであった。いいかえれば教授は、労働価値説と効用価値説とを「真実」の意味で「総合」しようという問題意識から、それ自体としてはたんなる価格論でしかない効用価値説を「本来の価値論」にまで高めるために、教授独自の効用測定論を展開されたわけである。

それはともかく、ここでわれわれはつぎの点に注意しなければならない。すなわち、白杉教授にあっては、効用が「最も本源的な」欲望充足手段としての労働に媒介されて「客観的な量化」をなした場合には、まさにそのことによって効用価値説が価値論としての有効性ないし真理性を獲得しうるものと考えられているという点がそれである。事実、教授はつぎのように書いておられる。

「効用を獲得するために支払わらるべき代償もしくは価格として最も一般的なものは人間の労働でなければならぬ。けだし、効用の獲得に必要な代償は、ときとしては財であることもあり、商品社会においては通常は一般的購買手段としての貨幣であるが、しかし財や貨幣も結局は人間の労働によって生産されるものであり、

スミスがいみじくも道破せるごとく『本源的購買貨幣』(original purchase-money)は労働であるからである。かくして、効用の本源的測定者は、その獲得に必要な人間の労働でなければならぬ、ということになる。そして、そのかぎり、我々は、効用価値説は労働価値説と結びつくことなしには価値論としての意義をもちえないのであって、それは労働価値説のなかに止揚されることによってのみ価値の説明に参与しうるにとどまる、
と云つてよからう』（『経済学史概説』三三三—三三六ページ）。

このように白杉教授は、われわれにはすでに馴染みぶかい効用測定論を説かれたのちに、「効用価値説は労働価値説と結びつくことなしには価値論としての意義をもちえないのであって、それは労働価値説のなかに止揚されることによってのみ価値の説明に参与しうるにとどまる」とされるのであるが、これは裏返えして言えば、教授にあつては、効用測定⁽¹⁾の媒介者が「最も本源的な」欲望充足手段としての労働——あるいはスミス流の表現でいえば「本源的購買貨幣」としての労働——においてとらえられるときには、効用価値説がかの「致命的な循環論的誤謬」からまぬがれて価値論としての意義を獲得し、こうして「価値の説明に参与しうる」ことになる⁽²⁾と解されている、ということの意味するものにはかならない。そしてそのかぎり、教授においては、欲望充足手段としての労働に媒介されて「客観的な量化」をとげた効用は、価値の規制者としての役割をはたすものとされている⁽³⁾。別言すれば教授の場合には、欲望充足手段としての労働はたんに効用測定⁽⁴⁾の媒介者であるばかりでなく、同時に「価値測定⁽⁵⁾の媒介者」(『価値の理論』一一〇—一一一ページ)つまり価値の規制者でもあるわけである。この点は、教授がその効用測定論をもって、「価値⁽⁶⁾を、生産の側と消費の側とから総合的に——いいかえると生産の側と消費の側を包摂して——説明する」ものとされている(『経済学史概説』三三三—三三六ページ参照、⁽⁷⁾力点——引用者)こ

と、さらにまた教授が、「一般的な欲望充足手段としての労働を欲望と対立させ、両者の相互媒介を考察することによって、初めて、我々は、具体的、価値観念に到達することができるとあらう」（『価値の理論』一六六ページ、力点——引用者）と述べておられることから明らかに明らかである。

（注）したがって、効用の大小が価値の大小を左右するものと解されている点では白杉教授の場合も限界効用学派の場合も異なるところがない、ということができよう。ちがいはただ、限界学派にあっては効用が労働とはまったく無関係に直接、価値を規定するものとされているのに対して、白杉教授の場合には、効用は、それが「最も本源的な」欲望充足手段としての労働に媒介されて「客観的な量化」をとげたときにはじめて価値の規制者たる意義をもちうると考えられている、という点にあるにすぎない。なお、この点については『価値の理論』四六ページが参照されるべきである。

しかしながら、ここでわれわれは、白杉教授によって価値の規制者とされている労働が、商品に投下され対象化された労働ではなくて、「〔欲望〕充足に支出しよう」と決意される労働——スミスのいわゆる「本源的購買貨幣」としての労働——にはかならないという点を見落してはならない。すなわち白杉教授はこの場合には、商品の価値をその生産のために必要な労働量によってではなく、その商品の購買のために必要な労働量によって、つまりその商品が支配し購買しうる労働量によって規定されているわけである。これは教授が事実上、スミスの支配労働説と同じ立場にたっておられることを意味するものにほかならない。したがって、支配労働説の見地にとつてスミスが一定の歴史的な範疇としての商品を永久的・一般的なカテゴリーに解消していたのと同様、教授においてもまた、商品からその特殊な形態規定性がとりさられて、それが事実上、超歴史的な概念に還元されているといわねばならない。そしてこれはむしろ当然のことである。というのは、教授によって価値の規制者たる役割を担わされている労働は、あらゆる社会形態に共通的にみられるところの、「最も本源的な」「最も一般的な」

欲望充足手段としての労働——あるいは「人間経済一般の究極の欲望充足手段」（力点——白杉教授）としての労働にはかならないからである。

（注）この点については拙稿『価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカードウ（上）』（本誌第六卷第一号、二六—三二—ページ、四二—三—ページ）を参照されたい。

ところで白杉教授は、大熊信行教授の周知の「配分原理」を批評しながら、この「配分原理」は労働価値説が効用価値説によって媒介される側面を一面的に強調するものだとし、つぎのように述べておられる。——「労働が普遍的な欲望充足手段であるという思想をつらぬくことによって、初めて、単に効用価値説が労働価値説を媒介するだけでなく、同時に反対に労働価値説が効用価値説を媒介するという認識への道が開かれてくるであろう。……しかるに、「大熊」博士は、一般的な欲望充足手段が労働であるという見解を貫徹することがなかったがゆえに、欲望が労働を規定するばかりでなく、同時に労働が欲望を限定するという見解に到達することができなかったのである」（『価値の理論』一一六ページ、力点——白杉教授）。「欲望が労働を規定し、消費が生産を規定すると同じく、労働が欲望を規定し、生産が消費を規定する。労働が欲望に応じて配分されごとく、欲望は労働に応じて配分される。労働価値説が効用価値説によって媒介される側面をもつと同時に、効用価値説は労働価値説によって基礎づけられるのでなければならぬ。しかるに、大熊博士においては、労働をもって一般的な欲望充足手段とする見解を徹底せず、労働と欲望との間に弁証法的な関係を見ることがなかったところから、労働価値説と効用価値説との総合はいまだ一面的にとどまっているのである」（同上、一一八—ページ）。

このように白杉教授は、「労働が普遍的な欲望充足手段であるという思想」を貫徹することによってはじめて、

「労働価値説が効用価値説を媒介するという認識への道が開かれてくるであろう」と主張されるのであるが、しかし上乗の検討から明らかのように、ここにいわゆる労働価値説とは投下労働量による価値規定（あるいはマルクス段階における労働価値説）を意味するものではなくて、実は支配労働量による価値規定——つまり支配労働——のことにほかならないのである。したがって、「労働と欲望との間に弁証法的な関係を見る」ときにのみ労働価値説と効用価値説との「眞実」の「綜合」が可能だとする教授の見解もまた、いうところの労働価値説が實質的には支配労働説にすぎない点を考慮したうえで価値判断されねばならないであろう。実際、白杉教授がその独自の効用測定論を提唱される場合には、教授は事実上、効用価値説と支配労働説——これはエキゾテリックシユな視点にたつスミスによって展開された非科学的な価値論である——との「綜合」を問題にされているのである。ここにおいてわれわれは、「効用測定の原理」をめぐる教授の議論がどの程度の学問的意義をもちうるものであるかを察知することができるであろう。端的にいつて白杉教授の効用測定論は、その理論的性格の点ではスミスの支配労働説とほとんど異なるところがないのである。